



株式会社 東夢

ワインの製造、販売

代表者名 代表取締役会長 高野 英一 設立年月日 2004年(平成16年) 12月1日

所在地 〒409-1316 山梨県甲州市勝沼町勝沼 2562-2

T E L 0553-44-5535 F A X 0553-34-5354

E-Mail toumu0553@xui.biglobe.ne.jp U R L http://toumuwinery.com/

資本金額 2,500 万円 従業員数 9 人

Interview



代表取締役会長
高野 英一

Theme テーマ 半自動瓶詰めラインの構築を通じた果実酒瓶詰めサービスの提供

製造コストを押し上げる原因となる瓶詰め作業の改善のために、自動瓶詰めシステムを導入した。その結果、これまでの 3 倍の効率で瓶詰め作業ができることを確認し、瓶詰め作業の請け負いも可能であることを検証した。これにより、勝沼ワイン村内での連携基盤が整い、ブランド力強化も期待できる。

近年、国産ワインの品質は向上し続けており、取り扱い店舗は増加傾向にある。なかでも山梨県はワイン王国として知られ、県産ワインは地域に密着した話題性や安全性の面から市場は今後も拡大していくと考えられる。一方で、産地以外の飲食店では低価格の海外産ワインがほぼ市場を占めているのが現状だ。市場の開拓には、品質向上だけでなく価格競争力もカギを握っている。

国産ワインの価格を押し上げている原因の一つが瓶詰め作業だ。ワインの瓶詰めは、瓶を洗って中身を充填し、コルクで栓をしてキャップシールによる封印を一気に連続して行う必要がある。東夢ワイナリーはこれまで、同規模の他のワイナリーと同様、瓶洗浄機と充填機、コルク打栓機の三つを使用し、4 人がかりで作業を行っていた。しかし、規模の小さいワイナリーにとって 4 人もの人員は貴重。瓶詰めを行う日は作業にかかりきりになる上、1 日できる量は最大でも 1,000 本程度に限られており、負担が大きかった。

課題解決に向けて、同社はものづくり補助事業を活用し、瓶詰め作業をほぼ自動で任せられる「トリブロック自動充填機 BORELLI EURO 9-8-1」を導入した。同充填機は瓶をセットするだけで洗浄から

充填、コルク打栓まで仕上げてくれる。導入の結果、従来の方法で 500 本あたりの作業時間(片付け含む)が 4 時間半かかっていたところを 1 時間半に短縮することに成功。作業者の数も、自動充填機なら 2 人でも容易に作業することが可能になった。

会長の高野英一さんは「人員が半分で済むし、時間も短縮できるので、4 人で数日間かかっていた瓶詰めが 1 日でできるようになりました」と喜ぶ。「機械に瓶を乗せるだけで、あとは瓶をずっと洗いながら、同時に充填し、キャップをした状態のものが次々と連続して出てきます。ゆっくりではあるけれど休まず動き続けてくれるのはありがたいですね。現在は 1 日あたり 3,000 本詰められます。今後は最大 5,000 本ぐらいまで詰めることが可能だと思います」。

良質で低コストな国産ワインを提供したい。高野さんは新たな“戦力”の導入によって、価格競争力の向上に期待を寄せている。またヨーロッパでは、他のワイナリーが醸造したワインの瓶詰め作業をまとめて請け負うこともよくあると言い、今後は瓶詰め作業の請け負いによる売り上げ増加も見込んでいる。



● 導入したトリブロック自動充填機



● 中央のレールに瓶を乗せるだけで洗浄、充填、打栓を行う



● 売れ筋ナンバーワンの「樽熟成勝沼Bijou Noir」(ビジュノワール)

耕作放棄地を開墾 ゼロからのスタート



● 多彩な商品が並ぶショップ

ブドウとワインの町・甲州市勝沼地区の出身である高野さんは、以前は電力会社に勤務していた。「定年を目前に控えたある時、山のふもとがブドウ畑ではなくススキが一面に生えて真っ白になっているのを見かけたんです。そこは耕作放棄地になっていました。近くの寺が所有している土地だと聞き、寺に草刈りを申し出ました」。

生まれ育った地域に恩返ししたいとの思いから、寺の許可を得て耕作放棄地の草刈りに通うようになった。しかし、これが想像以上に大変な作業だった。

「以前のブドウ棚がつぶれていて、針金やコンクリートが埋まっているような状態でした。そのままでは草刈りができないので、まずペンチで針金を切って始末するところから始めなければなりませんでした」。全体がヤブに覆われていて土地の全容をつかみにくく、歩いていると、川が流れた跡と思われる深くぼみに足をとられたことも。2 年かけて

何とか整地したが、雑草は刈ってもまたすぐに生えてきた。「管理しないと草が次々生えてくる。これは元のブドウ畑に戻さなければだめだと思いました」。

ブドウ栽培もワイン造りの経験もなかったが、そんな逆境にも、伝統校・日川高野球部時代に育まれたメンタルの強さと体力には自信があった。「あの頃の苦しさを思えば、大抵のことは耐えられます(笑)。会社員の時も先輩から『お前は(他の社員と)どこか違うな』と評価してもらうことが多かったです」。農業をしている友人や同級生にもアドバイスを求めながら醸造用ブドウの栽培に取り組んだ高野さん。この経験が、後に日川のほとりで「東夢ワイナリー」を設立するきっかけとなった。



● 早摘み甲州種ブドウの白ワイン「Sayaka 爽香」

ブドウとワインの町・勝沼の風景を守りたい

退職金や友人からの借入金などを資金に充て、2004(平成 16)年に創業。当時を振り返り、「JR 塩田駅前や河口湖のイベントなどに販売に行くわけです。1 日中、大勢のお客さんに試飲を勧めて、売れたのは 1 本。でもその 1 本売れたことが本当にうれしかったですね」と懐かしむ。試行錯誤を重ね、現在は年間 25,000 本を販売するワイナリーへと成長。自社のブドウでワインを醸造するほか、買い取ったブドウを栽培者ごとに醸造する「個別醸造」を行い、地域の農家から喜ばれている。「自分の畑で採れたブドウだけで造られたワインは農家にとって格別です。ラベルも栽培者ごとに作製しています」。

一方、勝沼はワイナリーが点在しているが、ワイナリー巡りをするための移動手段や食事ができる場所、宿泊施設が少ないという。そこで、今後のさらなる成長戦略として取り組んでいるのが、2020 年

にオープンした「勝沼ワイン村」だ。約 7200 平方メートルの敷地に同社を含め八つの小規模ワイナリーが並び、売店やレストランも併設。勝沼の新たな観光スポットとして注目を集めている。今後は敷地東側に宿泊施設を設ける計画で、さらなる地域振興につなげたい考えだ。ワイン村を構成するワイナリーはいずれも東夢で醸造技術を学び、新たに起業した人たちで、地域の耕作放棄地などを活用しながらワインを造り、互いに情報共有やワイン文化の発信に取り組んでいる。

今後の夢は? の問いに、高野さんは「唱歌『ふるさと』の歌詞に『山はあおき故郷 水は清き故郷』とあるように、私のふるさと勝沼の山や水がいつまでも美しいままでいてほしいです。地域の人に喜んでもらえる取り組みを今後も続けていきたいです」と話した。



● 個性的な味わいと確かな飲み応えの「樽熟成 FUTURE2019」



● 東夢ワイナリーのショップ入口



● 八つのワイナリーが並ぶ「勝沼ワイン村」